

女庭訓往来を読む(1)

史料「女庭訓往来倭文鑑」睦月(往信)

〔奥貫家文書No.3271〕

女庭訓繪抄

庭訓の三宮論語  
 の義に類する書に  
 庭訓の義に類する書に  
 庭訓の義に類する書に  
 庭訓の義に類する書に  
 庭訓の義に類する書に  
 庭訓の義に類する書に  
 庭訓の義に類する書に  
 庭訓の義に類する書に  
 庭訓の義に類する書に  
 庭訓の義に類する書に

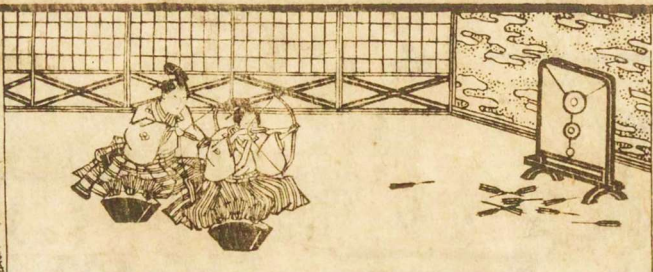


夫木  
 全平  
 拾枝抄に曰二月五日五  
 の有りては方ををいれ  
 とれぬやうにひく二百  
 のをいれあつひるとも  
 松のひくとの葉の如  
 合志をなすといひ洗  
 あれと身にいれぬと  
 衣をいれぬといひに  
 より先にあつひるとも  
 れの平のむいふあつひ  
 て寄る一難にいれぬ  
 日のひるにいれぬと  
 不也にいれぬと

女庭訓往来  
 年々始乃亦悦事甚  
 画さぬ目出とほあつひ元  
 二幼子月夜若者後つ庭  
 小松と杜若りくも代  
 此等の書と倭漢との  
 新小連の作若者難採不

心入きて二方の木厨の  
 二基より何れとあ出あふ  
 教化を本使とて凡採り  
 二小はの目も等と成惜糸  
 二ええと山は又若者房  
 大推本と梅乃盛なる並  
 木の花成賭とあつ七揚あ

揚弓

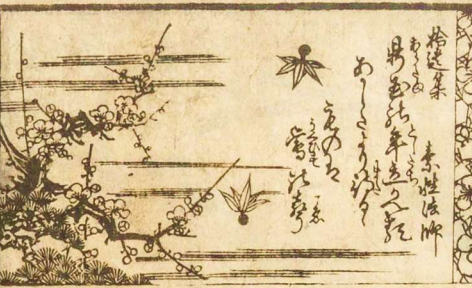


揚弓、唐の射宗帝時  
揚貴妃より始りし  
流あれと懐るのり  
揚柳の枝をよにり  
りてのてひりなとや始  
るんと貞文は作やなき

成と借し心も後にも心圓小  
然るに業も法津に  
あひ浮漂ひ候も方小入  
たる若死女た見せれ  
涙とあけすまら侍  
すのいあを名面中  
曲ぶつて空貫

睦月睦月 和名

睦月と云はれし中  
あはれもあはれひ月  
とあらば思はせり  
右對候也  
す。睦月とありし  
月とありし別れの  
言せしあれは相  
違とむにのり  
む月とありし  
お美則百葉考下  
居これ候



睦月睦月

侍従侍従

中誓中誓

しせり